NAKANOSHIMA SCREEN

日本のビデオアート -1980年代-

2011.10.22 SAT >> 10.23 SUN

JAPANESE VIDEO ART 1980s

ビジュアル・ブレインズ（風間正＋大津はつね）《Rec Zone》

第2回 中之島映像劇場 国立国際美術館 THE NATIONAL MUSEUM OF ART, OSAKA

国立国際美術館 B1 階講堂 入場無料 / 全席自由 / 先着 130 名（午前 10 時より整理券を配布 / 1名様につき 1 枚）

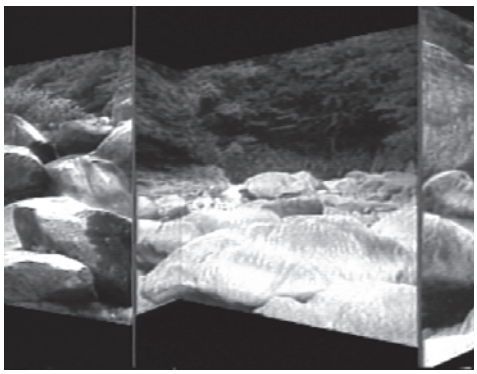
PROGRAM

10月22日(土)	13:00 - A プログラム ※ / 15:00 - B プログラム	10月23日(日)	13:00 - B プログラム / 15:00 - A プログラム ※

※ Aプログラム冒頭に担当者による解説を行います（20分程度） 主催｜国立国際美術館 協賛｜（財）ダイキン工業現代美術振興財団 〒530-0005 大阪市北区中之島 4-2-55

<お問い合わせ> 06-6447-4680（代表） <URL> http://www.nmao.go.jp ◇ 地下鉄四つ橋線「肥後橋駅」（3番出口）より西へ徒歩約 10 分 ◇ 京阪電車中之島線「渡辺橋駅」（2番出口）より南西へ徒歩約 5 分

ビジュアル・ブレインズ（風間正＋大津はつね）《Rec Zone》



伊奈新祐《Sha》

出光真子《洋二、どうしたの？》

日本のビデオアート -1980年代-

2011.10.22 SAT >> 10.23 SUN

国立国際美術館 B1 階講堂

入場無料 / 全席自由 / 先着130名（午前10時より整理券を配布 / 1名様につき1枚）

中之島映像劇場

国立国際美術館では1989年から映像作品の収集に取り組み、常設展示場で公開していました。近年、中之島に移転してからは定期的な上映会の形を取っています。さらに 2008 年には「Still/Motion 液晶絵画」展を開催し、絵画と映像とが交錯し合う現代の美術表現に光を当てました。さらなる展開を図ろうと、今年、2011 年の 3 月から「中之島映像劇場」と名付けました。メディアに立脚した、言葉の最も広い意味での「美術と映像」の歴史的な変遷を探り、現代の状況の解明を試み、さらには今後の動向をも予示出来ればと願っています。

● 展覧会情報：本上映会時には以下の展覧会を開催中です。

「世界制作の方法」「アンリ・サラ」
「中之島コレクションズ　大阪市立近代美術館＆国立国際美術館」
2011 年 10 月 4 日（火）～ 12 月 11 日（日）

国立国際美術館
THE NATIONAL MUSEUM OF ART, OSAKA
〒530-0005 大阪市北区中之島 4-2-55　TEL 06-6447-4680（代表）
◇地下鉄四つ橋線「肥後橋駅」（3 番出口）より西へ徒歩約 10 分
◇京阪電車中之島線「渡辺橋駅」（2 番出口）より南西へ徒歩約 5 分

PROGRAM プログラム

「中之島映像劇場」の第 2 回は、当館保管作品を中心として、1980 年代の日本のビデオアート作品を上映します。

誕生期（1960 ～ 70 年代）に続くビデオアートの 1980 年代は、興隆と高揚の時期であったと考えられます。

- （現在ほどではないにしても）カメラや VTR が普及し、技術的に細かい編集が可能になったこと。
- そうした装置システムを使える環境は容易には得られませんでしたが、美術系の大学などがビデオ機器を揃え、作家の育成に乗り出したこと。
- 1980 年、ビデオを専門に扱うビデオ・ギャラリー SCAN が誕生し、登竜門となる公募展を開催し、若手の作家の育成とともに、国際的な作家の交流を推進したこと（ビル・ヴィオラやゲイリー・ヒルの滞日制作）。
- ビデオ機器のメーカーが主催するコンテストが、アマチュア（ホームビデオ）とアーティストとに分け隔てのない門戸を開いたこと。
- 美術館でもアンデパンダン形式やテーマ展、作家展という形でビデオアートの展観を進めたこと。例えば、大阪府立現代美術センター（1980 年以降開催）、福岡市美術館（1981 年、「パフォーマンス・イン・ビデオ」展、ほか）、富山県立近代美術館（1983 年、「第 2 回現代芸術祭－芸術と工学」）、「第二の環－80 年代ビデオへの視点」の各地巡回（1984 年）、ほかです。特に、1984 年に東京都美術館で開催されたナムジュン・パイク展の影響は絶大であったと思われます。
- ビデオやメディア機器を使った表現に特化するフェスティバルが多数開催されるようになったこと（1985 年の「第 1 回ふくい国際ビデオ'85 フェスティバル」、「ハイ・テクノロジー・アート国際展 1986」、ほか）。

こうした状況下に多くの新人が育ち、あるいは、誕生期からの作家の仕事の展開が見られました。ビデオテープが簡単に郵便などで送付出来ることもあずかり、国際的な交流が盛んになり、この国の作品が海外の展覧会やフェスティバルにおいて上映されていきました（時には作家自身も参加しました）。

本上映会は、当館で昨年 9 月に巡回上映を行った「Vital Signals：日米初期ビデオアート上映会－芸術とテクノロジーの可能性－」に続くプログラムになります。日本のビデオアートの充実期である 1980 年代。本プログラムはその一端であるいくつかの傾向をかろうじて垣間見るにすぎません。

とはいえ、ビデオによる映像制作が簡易化し、美術と映像との複合が一般化した現在、今回上映する作品群が過去の仕事の再発見と評価、位置付けにつながり、同時に現在の状況を批判的に捉える契機となることを願うものです。

上映作品

A プログラム（60 分 53 秒 ＋ 解説 20 分）

斎藤信《Frame by Frame　DO-OR》《Frame by Frame　TO-W-ER》（1984 年／ 8 分）
斎藤信《Locus》（1985 年／ 3 分）
ビジュアル・ブレインズ（風間正＋大津はつね）《One Two 3 Times 3》（1986 年／ 1 分 38 秒）
ビジュアル・ブレインズ（風間正＋大津はつね）《Rec Zone》（1988 年／ 6 分 28 秒）
ビジュアル・ブレインズ（風間正＋大津はつね）《De-Sign 1（訓練）》（1989 年／ 9 分 35 秒）
伊奈新祐《FLOW (2)》（1983 年／ 6 分）
伊奈新祐《Sha》（1986 年／ 6 分）
島野義孝《カメラと、私のカメラ》（1983 年／ 8 分 3 秒）
島野義孝《ころがすこと》（1984 年／ 4 分 47 秒）
島野義孝《テレビドラマ》（1987 年／ 7 分 22 秒）

B プログラム（73 分）

寺井弘典《I SAY...》（1983 年／ 5 分）
寺井弘典《1・1/2》（1984 年／ 6 分 50 秒）
出光真子《グレート・マザー　幸子》（1984 年／ 18 分 50 秒）
出光真子《洋二、どうしたの？》（1987 年／ 18 分）
出光真子《清子の場合》（1989 年／ 24 分 20 秒）